

## 石と親しむ

D.G.ジョーンズ

詩人/カナダ・ロイヤル・ソサイエティ会員

われわれはふつう茶碗を見せられても戸惑ったりしない。手に持ってみて、感じがいいな、よくないな、見た目にきれいだ、唇にやさしいなどと思う。あるいは棚の上に置きっぱなしにする。それだけのことだ。ところが、何トンもある変わった形の石を見せられたら、とても慌てるかもしれない。これはいったいどう解釈すればいいのか。

作家と作品を紹介すれば、このような疑問が解けるわけではないが、われわれの気持ちはいくらか軽くなるかもしれないと思う。

理想的には、ケベック州東部ウエイズ・ミルズ村を望む齋藤家の明るい広々とした部屋で、花と魚の合の子のようなオードブルをつまみ、酒か白ワインをちびちび飲みながら、ルイーズと智のお二人と一緒に一時間ほど過ごしたい。それから、庭を散策して、太陽がアバラチア丘陵の向こうに沈むのを見つめる。そして、さりげなくそこに居をさだめたさまざまな石彫と、なにげなく親しくなってゆく。これこそ心身ともに満ち足りた生活の極みである。今までの苦労や混乱の瞬間、彫刻家さえ対処しなければならぬ数々の危惧と憂い、何にもまして恒久的な芸術の危機、それから一切の記憶が薄れるときである。

束の間の印象を恒久的な三次元の形に変える。傷のある石をなんとかする。地球にものを言わせる。

それから説明をつける。

人は茶碗を見せられても、何の意味ですかと尋ねようとは思わない。しかし、ある人が、身を切るような真冬の寒い明け方、家を出、石工に、私と一緒に腕によりをかけて、御影石を並大抵でない微妙な形に切ってくれと頼んだり、それをピアノ運送人に室内に置かせたり、工業用クレーンを使って芝の上に設置せたりするなら、われわれは彼に向かって、どういうつもりなのか、どんな意味があるのかとつい尋ねたくなるだろう。それもやむを得まい。

で、私ならどう答えるだろう。茶碗の扱いから、オリンピック記念モニュメント、つまりカナダシールド(カナダの東部および中部の先カンブリア紀の卓状地)やアバラチア山脈の石塊を、太平洋を越えて長野へ移すこと、その意味についてどう答えたらいいのか。

齋藤智は、明らかに、われわれが抽象芸術と関連づけて考える具象芸術にはとらわれず、自由に創作している。しかし作品は、どこから見ても一種の古典的(クラシック)な彫刻である。石に対する類い稀な感覚、線と量、どっしりと重い固体と空洞のスペース、攻撃と休止の相互

作用が、角度を変えるごとに絶え間ない驚きを見るものに提供してくれる。この点において古典的である。われわれが石彫のまわりを歩きまわると、その重量とバランスは作品自身の中で、相互の関係において変化する。すなわち石彫は、かすかに動いたり伸びをしたりする。休んだり、宙に浮いたり、ぶら下がったりする。だが、純粋に幾何学的な、あるいは分析的な変化、いわゆる「アブストラクト」のハーモニーと不協和音の様子を呈するようには見えない。なにか手や道具、空間での体の動きに関係する変化のように見える。そして、山そのものを驚かせる御影石の集積と表現になるのである。

ここで私は、智自身の言葉を思い出す。

オリンピック会場の(明時 アルバ)の除幕式で、智は、この石彫は、スタート直前の選手の中で集中力が凝縮する瞬間を表わしたものだといえる、と述べた。さらに、より大きな時間の観念を引き合いに出して、彫刻がよい作品であれば、何千年にもわたってまわりの山々と、調和を保ちつつ成長を続けるだろう、そうあってほしいと述べた。

つまり地球の時間ということだ。

前に智から、粘土を探しにいったノバスコシア州について、あるいは御影石を探して訪ねたケベック州各地の丁場(原石採石場)の話聞いたことがある。今は閉山された多くの小さな丁場はじつに美しい。言葉で表現できないほど美しい。皆の予想に反してぼくが大金持ちになったら、ぜひそんな丁場を一つ買いたいものだ。丁場では、地球の動きを、鉱石、砂、粘土、片石、御影石の層が形成される様子を、この目で見ることができる。地殻の格子構造(ラチス)や層が露出してるから。丁場での短い生活のあいだに石工が置き去りにした、妙に生き生きした瓦礫も一緒に。

石に魅せられる理由が、目なのか、色なのか、重さなのか、何なのかはわからないが、智が長野へ送ったものはたまたの石ではない。彫刻である。「芸術はふつう自然にはできないことだ。山にもできない」と智はいう。

作品の題名「アルバ」について 考えていたとき、智は、ギリシャ語の「アガルマ」という言葉にはある種の輝きや栄光の意味とともに、神を喜ばすために捧げる彫刻、贈物、献上物の意味があるとわかり、すっかり魅せられてしまった。私は、ここに鍵があると思う。

芸術というものは、おおむね昇華されたエロスだと私は思う。それで

なければ、芸術がわれわれを魅了するはずがないではないか。だが、もし、オルフェウスの竖琴のように、芸術が石をも踊らせ、神々に戦や恋の営みを中断させることができるならば、つまり、「自然」と「精神(スピリット)」を統合することができるなら、そんなエロスはなんと偉大なものであろう。他に類のないこのような喜びは、ふつうのつましく常識的な人を不思議な芸術の生産活動(エコノミー)へと誘うであろう。

もちろん読者は、こう反駁するかもしれない。必ずしもそのような偉大なアイデアが、特殊な事柄、つまり「アガルマ・メーカーである齋藤さん」の個々の作品を説明するとは限りませんよ。

私自身は、二つ並んだ大きな御影石の塊を見て、いっこう戸惑いを感じない。二つのうち、一つの側面はかすかに出っ張っており、もう一つは両面がやや凹んでいる。両方とも風をはらむ二枚の帆のように傾いている。作品の題は「石の風」。やや均斉をはずしたところ、また、この重い二つの石が風のように揺らいで見える事実によって、すばらしい作品になっている。

つぎに、「アリュール」と題する一対の石影を見てみよう。じつに気分を高揚させる官能的な作品ではないか。まるで堅固な二本の角柱が、体を開いて歩き出したような感じだ。ヨーロッパの大聖堂のアーチのように、また現代のファッション・ショーのモデルのように、なにかわれわれの心に訴えるものがある。ただし、脚、胴、鼠蹊部など、四肢のモンタージュはモデルほど骨ばってなくて、幾分もつとふくよかではあるが。人によっては、三次元的で英雄的な、マルセル・デュシャンの〈階段をおりるヌード〉に似ていると思うかもしれない。セ・スピリチュエール(なんとモザイクでユーモアがあるなあ)!

他の作品はこれほどはっきりしていない。あるとき私は、智に、「なぜこの石はあの石の上の上ののっている、それがまた別の石の上の上ののっているのか?」と尋ねた。すると彼は、今にも地面に落ちそうな木の葉の形について話した。御影石の重さの中に存在する木の葉のダイナミックな軽さ!

彼はまた、風で木が折れ曲がる様子、そしてほんの一瞬、重くてほとんど見えない束の間の愛撫を示す木の様子について話した。

歩きぶり、歩き方、体の動かし方にはいろいろある。素早く、ゆったりと扇情的な、どっしりと、熱に浮かされたような、傍若無人に、堂々と。これが「アリュール」という言葉が指摘する本質である。そして、揺れる

枝、歩く女性、季節ごとに変わる景色など、彫刻家のイメージーションの中に表わされるこのような出来事の色合いや特徴こそが、往々にして、石で語ってほしいと願うのだ。さらに微妙なことをいうと、鳥が枝に止まろうか飛び続けようか迷って宙に浮く一瞬や、小川の石の上に魚が浮き上がり飛びはねようとする一瞬、このような瞬時の心の緊張を、齋藤は石に体现するのだろうか。

時間を、一見静的で空間的な表現で表わしたいという欲望は、目に見えるいろいろなものを、単一の透視画の中に組込むキュビズムの作家たちの欲望に似ていると言えよう。しかし、これだけではなく、作家の関心は、さらに、石影の中に時間の感覚を喚起することにあるらしい。つまり、肉体が強靱に成長し、さらに変貌をとげてゆくにつれて、一種の壮麗さをおびると同時に、エントロピーの法則に逆らえないとの認識のもとに、一種のさびしさの影をおびてゆくこと。完成された彫刻は、この二つのあいだのすばらしい均衡の中に、ある平静さを表現する。そして、人々はこれを見たと安心する。いつ見てもすばらしいと思う。いかに現代的(コンテンポラリー)であろうと、齋藤の作品のフォルムは、永遠のなにか、太古から続くなにかを人に直観させるのである。

〈春の萌〉という謎に満ちた作品について、私は考える。初めてこれを齋藤家の庭で見たとき、不思議な彫刻だと思った。延びたリュート(ギターに似た弦楽器)ケースのような形をした、水平に長いピンクの御影石の作品である。これが、やはりピンクの、少し小さいくさび形の石の上の上ののっている。さらにそれが、少し色が濃くて小さい粗削りのまるい石の上の上ののっているのだ。ついこのあいだ私は、この石影の二つのヴァージョンの写真を写めていた。一枚の写真では、石影は、こんもりとした木立をバックにスロープになった芝生の上に置かれ、浮き上がって見える。もう一枚は、オフィスビルのガラス窓の前、砂を敷いた長方形の空間に置いた石影の写真である。写真手前とバック、さらにガラス窓の中に竹が数本植わっている。いずれの写真でも、彫刻はいかにも魅力的で親しみやすい感じに見えた。なぜだろう。答えを求めて、私は手持ちのイメージをあれこれ模索してみた。フラットストーンでできたイヌイトの男性像、京都の寺院庭園や鳥居の写真に関係があるもの、イースター島の石像まで、あれこれ考えてみた。そしてとうとう諦めてしまった。なぜこの彫刻は、田園風景の中でも都会の中でもあれほどよく見えるのだろうか、私にはわからない。明らかに近代的でありながら、

真に原始的なものを連想させるのはなぜか、私にはわからない。もしかすると、冬にやどる春に関係があるかもしれない。でも、こういったからって、本当に役に立つだろうか。

茶碗の場合もそうだが、明らかに私は体で彫刻を理解していたのだ。これは棚に置きっぱなしにすべきものではないと。千年もかからずに私は体で納得した。なんという静かな喜びだろう。

カナダ、ケベック州ノースハントリーにて

1997年12月15日

(小泉摩耶訳)